

地域デザインフォーラム視察報告 (森の番所)

日 時：2010年6月16日(水) 14:00～17:00

会 場：民間交番「森の番所」ほか(板橋区南常盤台二丁目4番3号)

説明者：(南ときわ台民間交番管理運営委員会)

小林保男事務局長

出席者：(大東文化大学)

浅野美代子法律学科教授 大杉由香環境創造学科准教授

(板橋区)

大澤宣仁板橋東清掃事務所長 宮津毅再開発課係長
村山寛子生きがい推進課係長 柏田真健康推進課主任
事

視察目的：民間交番「森の番所」は、ときわ台駅周辺における防犯・防災活動を進め、地域住民の安全・安心に寄与することを目的とし、町会・商店会・PTA等の有志により結成された運営委員会が管理運営している。「森の番所」の活動内容等について説明を受け、地域住民による防犯及び地域活性化の成功事由について学ぶ。

1 「森の番所」開設の経緯と目的

(1) 常盤台地域の特徴

昭和7年10月に板橋区が誕生するまで、現常盤台地区は上板橋村という地名だった。

増え続ける東京の住民は郊外へと住まいを拡大していき、昭和8年には東武鉄道が常盤台地区を住宅地とするため、現ときわ台駅の北側にあたる地区の区画整理を開始した。この常盤台

住宅は、内務省の役員であった小宮憲一の設計によるもので、クルドサックやロードベイという斬新な手法を取り入れた街づくり、モデルハウスによる住宅のレベルの維持、隣の敷地に影が入らないように建築するなど、「板橋の田園調布」と呼ばれるような、景観に配慮した高級住宅地となっていた。板橋区教育委員会発行の「常盤台住宅物語」によると、戦前は、帝国大学（現在の東京大学）卒など高学歴の居住者が多かった。当時1区画100坪程度で、540区画が分譲されたが、現在は相続問題等により分割され、町並みに変化が見られるところである。

昭和10年にときわ台駅ができたが、当時駅長は駅に居住しており、戦前、東武鉄道と常盤台地区はいわば一体化していた。また、“自分たちのことは自分たちで”という気風があったことも、常盤台地区の特徴であった。

一方、「森の番所」のある現ときわ台駅の南側にあたる地区は、天祖神社の氏子組織を中心とした歴史のある地区であり、新住民である北側地区とは住民の生活態様に違いがあったが、住民同士は文化の違いを認め合い、共存している。

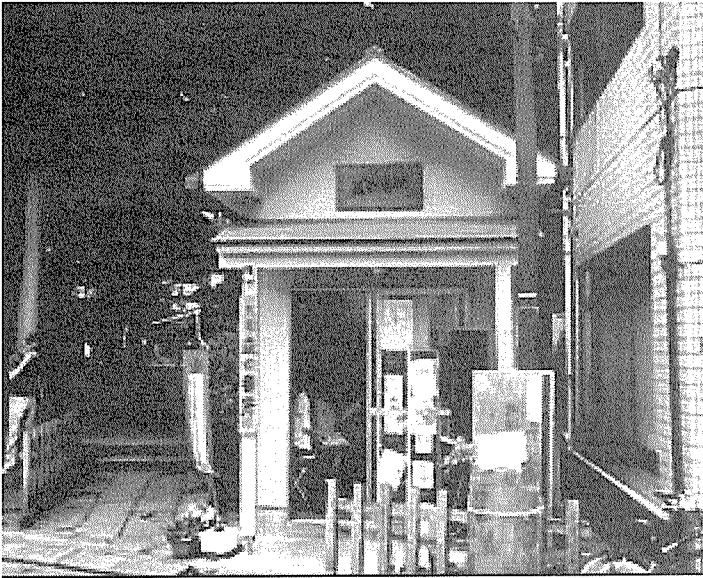
(2) 開設のきっかけ・経緯

ときわ台駅南口にある商店街は飲食店を中心としており、治安対策には特に関心が深かったため、平成14年頃から交番誘致運動を進めていたが、なかなか実現されなかった。

そこへ、平成18年度「東京都特定施策推進型商店街事業」の補助対象の中に、治安（地域の防犯拠点の整備）として民間交番設置事業が提示されていたことから、常盤台駅南口商店会で交番誘致の代替としてこの事業に応募し、認可された。

ところが、一商店会だけで対応するのは荷が重く、隣接商店会や町会などと協働すべきという意見が出されたため、この事業が地域全体にとってプラスになるという判断から、関連町会の有志が核となって、第三者的組織「南ときわ台民間交番管理運営委員会」を平成18年10月に立ち上げた。

同年12月17日に「森の交番」として開所したが、「交番」



天祖神社横の「森の番所」

は公用語になっているということから、翌年1月1日に「森の番所」と改称した。

当時、民間交番は都内で上野、明大前、町田、調布など数か所しかなく、板橋にもぜひ民間交番をと協力、支援してくれる方々もいた。けれども人的援助となる警察官OBの配置等については自主的運営の観点から断ったという。

(3) 管理運営団体

「森の番所」(以下「番所」という。)の管理運営を行う「南とさわ台民間交番管理運営委員会」の構成は、常盤台駅南口商店会のほか、隣接の常盤台銀座商店街振興組合、常盤台南口神社通り商盛会、さらに、商店会が属する町会である南常盤台一丁目町会、南常盤台二丁目町会、地域内の福祉施設である社会福祉法人JHC板橋会をメインとして位置づけている。また、協力団体として、隣接する六町会、地域内の小中学校・同PTAにも参画を依頼している。

役員構成は、会長、副会長、幹事長、事務局長、事務局次長が各1名、幹事、会計、庶務、監事が各数名となっている。また、会員は一般会員、賛助会員、特別会員で構成されている。

会員は当初115人集まったが、現在は86人（一般会員47人、賛助会員35人、特別会員4人）となっている。会員数が減少した原因の一つには、当初に支払いされた会費が1年分であることに気づかず、永年会費と思われた可能性があるとのことである。

活動主体は一般会員だが、番所に常駐する等、活発な活動をされているのはこのうちの3分の1ほどである。

(4) 「森の番所」開設の目的

番所は、ときわ台駅周辺における防犯・防災等の事業を遂行し、地域住民の安全・安心に寄与することを目的としている。

番所内に掲示されている「森の交番宣言」には、①常駐、見守り案内、②パトロール、③情報収集、関係機関との連携、④地域交流の拠点、⑤緊急時には無謀な行動をとらず、110番で対処、という活動方針が掲げられている。

2 「森の番所」の活動内容

(1) 施設概要

番所は、天祖神社の正門横にあり、敷地は神社から無償で借り受けている。建物は、神社の森に合わせた純日本風の木造平屋建て、建坪8平方メートル、トイレ、空調付きで、7～8人が入ることができる広さとなっている。施設の建築費約270万円のうち8割は東京都からの補助金であるが、補助金申請後に発生した設計等の必要経費は番所の負担となってしまった。

(2) 活動内容

①常駐

常駐は2人一組で、1日3交代（午前；8時～12時、午後；13時～17時、夜間；18時～21時）。開所以来、年中無

休で運営している。

平成 20 年度は延べ 1690 人、平成 21 年度は延べ 1730 人が常駐した（交通安全運動含む）。

ただし、会員は町会・商店会等が母体で仕事を持っている方や高齢の方が多いため、常駐のできる方がなかなか集まらない。現在、一人の方（Tさん）に大半の時間、番所に詰めていただいております、この人の存在が大変大きい。

なお、Tさんは、元高校教師であり、かつて地域とはあまりコミュニケーションがなかったという。番所は、このような人材を地域の担い手にするきっかけになっているという意味においても、重要な成果である。

②パトロール

1日1回を原則とし、時間帯は不定。警察犬の訓練を受けた大型犬（ラブラドルレトリバー）の「まる」と一緒にパトロールすることもあり、町の人気者となっている。

また、番所は町会事業の町内パトロール、歳末夜警の詰め所としての役割も果たしている。



番所の人気者「まる」

③情報の収集管理

番所には板橋区から週1度犯罪情報が届き、警察とも緊密な連絡を取り合っている。しかし、パソコンによる情報収集については、若いメンバーが入らず、当初目標より難しい状況になっている。

一方、番所に道を聞く方からの情報や町の噂話、パトロール時の見聞などにより、日々動く生きた町の情報が集まってくる。これらの情報を受け、番所での道案内に活用するよう、問い合わせの多い店の地図を貼り出すなどして対応している。

④交流

番所は年中無休で常に人がいるということで、通りがかりに声をかけてくれる人、会釈してくれる人、遊びに来てくれる子どもたちなど、地域の人との交流の場となっている。

(3) 活動の実績

常駐、パトロール以外の平成21年度の主な事業は以下のとおりである。

- | | |
|-----------|--|
| 4月6～15日 | 春の交通安全運動詰め所（南常盤台一・二丁目合同） |
| 5月17日 | 総会 |
| 6月8日 | ひたたくり防犯キャンペーン（板橋警察署からの依頼。番所6人でチラシ等の配布） |
| 7月27日 | ひたたくり防犯キャンペーン（ときわ台駅南口・北口にて防犯ネット等配布。番所10数人、警察官4人） |
| 7月末 | 上板橋第三中学校校外班パトロール拠点 |
| 8月1日 | お休み茶屋として番所前で冷水接待（200人以上） |
| 9月21日～30日 | 秋の交通安全運動詰め所（南常盤台一・二丁目合同） |
| 12月17日 | 開所3周年記念パトロール（防災・防犯の講習会も実施。参加者55人、警察官12人） |

12月26日～29日 年末夜警詰め所（ボーイスカウト板橋15団、南常盤台二丁目町会、大人101人、子ども34人）

2月26日 ひたたくり防止キャンペーン（ときわ台駅北口。番所5人、警察官3人）

3月1日～31日 板橋警察署雇用対策事業への協力（4人の方を受け入れ、番所に詰めていただいた）

その他、平成21年12月末～3月末まで、常盤台・ポローニャ交流訪問団実行委員会事務所となった。

（4）活動の経費

平成21年度の収支決算書は以下のとおりである。

収入の部			支出の部		
項目	決算額	備考	項目	決算額	備考
前年度繰越	276,093	20年度	光熱水費	72,822	
賛助会費	375,000	35人・団体	電話代等	69,852	
特別会費	120,000	4人	会議費	13,889	お茶代等
会費	101,000	47人	行事費	75,098	周年パトロール
寄付金	66,635	交通安全使用料、募金	保険	133,200	1日6人×365日
その他	59	利子	常駐・パトロール	231,000	実費弁償延39人
			予備費	42,785	マットなど
計	938,787		計	638,646	

会費は、一般会員が年会費一口1,000円以上、賛助会員が同一口5,000円以上、特別会員が同一口30,000円となっている。

3 「森の番所」の活動による効果と今後の課題

(1) 活動の特徴

番所の管理運営をする「南ときわ台民間交番管理運営委員会」は基本的にはボランティアで、建物等の維持管理経費は会員の会費で賄っている。活動しながら、経費も負担するということで、活動されている方々のこの事業にかける熱意とボランティア精神により、番所が成り立っている。

番所設立の契機が地域の課題解決だったということもあり、防犯・防災という公共的な活動で地域の方々が自主的にマンパワーと資金を出し合っておられ、まさに昨今話題となっている「新しい公共」を実践されているといえる。

また、番所は当初、週5日開所する予定であったが、平成19年2月のときわ台駅踏み切り事故による宮本警部殉職を追悼する記念碑建立の事務局となったことなどから、正月を含め、年中無休での開所を続けている。地域で求められる役割を柔軟に果たしていく活動姿勢により、認知度が上がり、皆に親しまれる「まちの番所」になっている。地域の人々から寄せられる反応のうち、およそ8割は好意的な意見であるという。

(2) 活動による効果

①防犯・防災

駅前、商店街で夜騒いでいた中学生・高校生の姿が見えなくなったこと、自動車・バイク・自転車の違法駐車が減ったことや、犯罪の抑止力となっていることが挙げられる。近隣住民からも「夜間帰宅時に、番所の灯りを見ると安心する」という声も寄せられ、番所の存在意義は大きい。

②人の交流

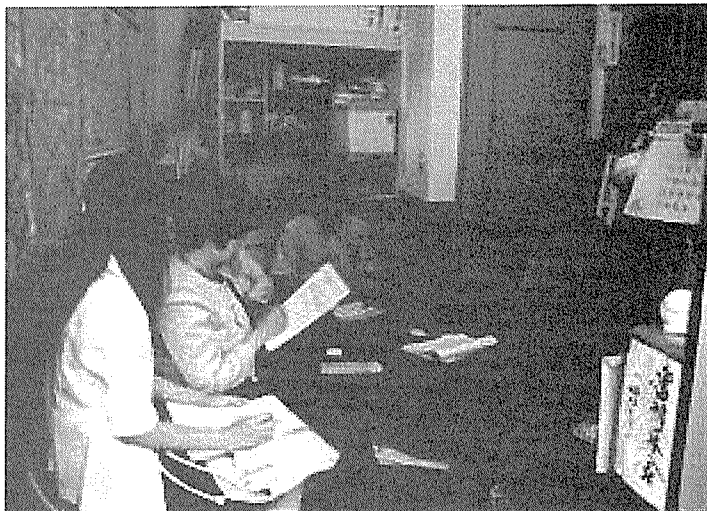
先述のとおり、番所は年中無休で常に人がいるということで、通りがかりに挨拶する方、立ち寄る方などが増え、地域の人との交流の場となっている。また、番所は、運営側の会員にとっても、例えば退職後の活動の場、居場所として、人との交流の場・機会となる効果もある。

③地域の活性化

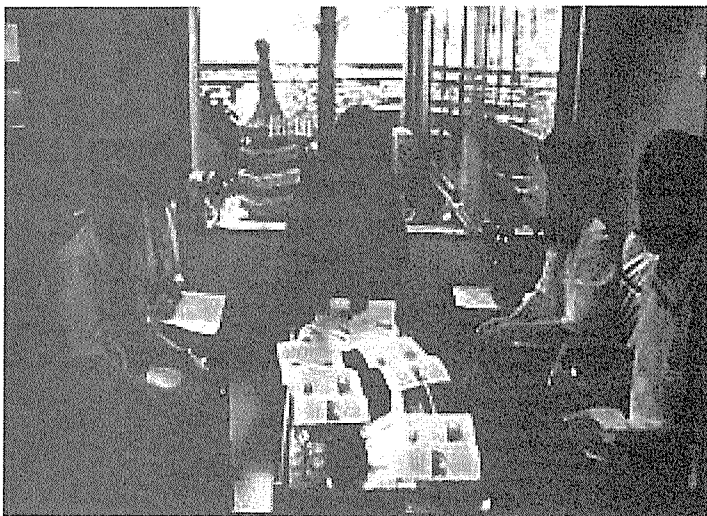
番所が新聞、週刊誌、ラジオ放送等のマスコミによって好意的に報道され、常盤台地区の特徴として、区外にも名を知られるようになった。板橋区の中では、大山の商店街、中板橋のへそ祭り、上板橋の「とれたて村」、成増の童謡まつり等が有名であるが、常盤台の「森の番所」も防犯・防災のみならず、まちの拠り所として様々な役割を果たされており、これからも地域の活性化につながる活動が注目される。

(3) 今後の課題、将来像

- ①番所設置の際に集まった会員には町会・商店会の役員や役員経験者が多いため、中高年層がほとんどである。今後は会員数を増やすとともに、さらに若い世代にも会員となってもらい、活動の幅を広げることが望まれる。地域活動者の高齢化は、番所に限らず、町会・老人クラブ等地域活動の共通の課題とも言えるが、4年後には65歳以上となる団塊の世代を始め、増加するシニア世代の方々が地域の活動に積極的に参加されるよう、身近な住民からのPR・勧誘の力が期待される。ただし地域のリーダーに関していえば、素質の問題もあり、意図的に育成することは難しい側面がある。
- ②番所は、商店会や町会活動と共同で活動しながら、性別、年齢、経験、所属にかかわらず、共通の目的を持つ人々が地域を語るつどいの場「サロン」となることを目指している。また、高齢者や中学生のボランティア参加や学校の体験学習の場となるなど、様々な活動について検討されている。今後多様な地域のニーズに応じて、番所が地域の拠点としての役割を果たしうると考える。



森の番所内



天祖神社内での視察風景

(参考図) ときわ台駅を中心とした「森の番所」の対象エリアと協力エリア

